

喪失を回想する

—*A Pale View of Hills*における回想の意味—

(英米文学研究室) 竹 永 雄 二

Remembering Lost Things

—Meanings of Remembrance in *A Pale View of Hills*—

Yuji TAKENAGA

(平成23年6月10日受理)

はじめに

1) 論文の目的

Kazuo Ishiguroの小説の第一作、*A Pale View of Hills*は、既に多くの指摘があるように、内容的にも手法的にも過去の回想（あるいは記憶）が重要な意味を持っている。しかしこれまでの研究はどちらかと言えば「信用できない語り手」（ロッジ、1997）や、語りの手法の背後に潜む自己欺瞞、責任転嫁、自己正当化など（Shaffer、1998）、回想の否定的側面の分析が中心で、回想の肯定的側面について論じられることが少なかったように思われる。そこで本研究では、娘の自殺という痛ましい過去を回想することが主人公Etsukoにとってどのような意味を持つのか、作品中においてはEtsuko自身「過去を振り返っても何も得られない」（There is nothing to be gained from going over such matters again. (PVH 91)）と断じているが、果たしてそうなのかどうか、逆に回想は彼女の苦痛を軽減する効果を持ったのではないかという問いかけを中心に、この作品における回想の意味について考察してみたい。

2) 作品について

この作品の主人公は戦後イギリス人と再婚して、イギリスの田舎で静かに暮らすEtsukoという日本人の中年女性である。彼女は最初の結婚で日本人の夫Jiroとの間に生まれた娘Keikoを連れてイギリスにやって来るが、Keikoは適応障害を起こし、家を飛び出して、その後マンチェスターのアパートで首つり自殺をしてしまう。恐らくEtsukoはその衝撃から容易に立ち直れないでいる

と思われる。彼女の表面上の静けさの下に、激しい感情の動乱が隠されている。このようなEtsukoのもとへ、Etsukoが再婚したイギリス人（既に死亡している）との間に生まれたNikiが、現在一人暮らしをしているロンドンから帰省して来る。物語はNikiが滞在した5日間の出来事への回想、そしてその5日間に彼女が思い出した戦後間もない長崎での出来事への回想という二重の回想が丹念に撚り合わされて構成されている。Etsukoの想いは意識的にも、無意識的にもすべてKeikoのことで占められているように思われるが、Keikoのことは断片的に触れられるのみで、実際に語られるのは別の人物の回想である。以下に、心に深く傷を負った人間の回想の軌跡と、回想によって主人公にどのような変化が起きたかについて考察してみたい。

3) 考察の方法

Etsukoの回想の対象は主に過去に長崎で出会ったSachiko-Mariko母娘、長崎での恩人Ogata-San（一時義理の父親であった）、最近（4月）ロンドンから帰省して5日間滞在した娘Nikiである。これらの人物を中心にEtsukoの回想を人物ごとに4つの側面に分類し、それぞれの回想の特質について考察をする。

I Sachikoについての回想

1) 自立の困難さ

この作品ではEtsukoがどのようにして、イギリス人新聞記者と知り合い、愛し合うようになり、Jiroと離婚し、再婚してイギリスに移住したか、また 母の再婚を

Keikoがどのように受け止めたかについてはほとんど語られていないが、その語られていない部分は、Sachiko-Marikoの母娘関係に投影されているように思われる。Sachiko-Mariko母娘はEtsuko-Keiko母娘のその後の生活の予兆、あるいは鏡としての役割を果たしていると思われる (Shaffer, 1998)。

物語は*Waste Land*を連想させるような、象徴的な情景描写で始まる。敗戦後の長崎の復興を象徴する川縁にたつ4棟のアパートの一つでEtsukoは電気会社に勤めるJiroと新婚生活を送っている。近代的なアパート群の前には開発から取り残された荒地が広がり、その中に周囲から孤立して家が一軒建っている。そこにSachiko-Mariko母娘が東京から引越して来て、生活を始めるところから、Etsukoの回想は始まる。女性として周囲とは異なる生き方を選択し、自立することの困難さを象徴する情景である。

One wooden cottage had survived both the devastation of the war and the government bulldozers. I could see it from our window, standing alone at the end of that expanse of wasteground, particularly on the edge of the river. (PHV 12)

女性として自立して生きることの困難さは、Sachikoが現在交際していると思われるアメリカ人男性とアメリカへ移住することに対する彼女の決断の揺らぎに現れている。

2) Sachikoの決断の揺らぎ

最初にSachikoがEtsukoにアメリカに移住する決断を述べるのは、ある夏の夕暮、二人で姿が見えなくなったMarikoを探しに出かける時である。それを聞いて、Etsukoは生活習慣、言葉の違いなど大きな困難を伴うのではと心配する。

“Difficulties?”

“I mean, moving to a different country, with a different language and foreign ways.” (PVH 43)

しかしSachikoはまったく気に留めていない。彼女はMarikoのことを慎重に考慮して、そしてMarikoの幸福のためになると判断して、このような決断をしたのだと説明する。さらに続けて、アメリカは子供の成長にとってよりよい国であり、より多くの成功の機会を提供して

くれる国であり、女性にとってより快適な生活が送れる国であると、Sachikoは述べている。

“Mariko will be fine in America, why won't you believe that? It's a better place for a child to grow up. And she'll have far more opportunities there, life's much better for a woman in America.” (PVH 46)

SachikoがEtsukoの部分的鏡という視点で解釈すれば、Etsuko自身の楽観的予測に対する自責の念が重ね合わされているかもしれない。

次にSachikoがEtsukoを訪ねて来た時、彼女はアメリカ人が姿を消したことを告げる。このようなアメリカ人と一緒に娘のMarikoを連れてアメリカへ移住しようというSachikoの計画はとても危険であるように思われる。それにも拘わらずこの男を捜しに行こうとするSachikoは愚かしく感じられる。しかしEtsukoは親身になって彼女のことを心配し、金銭的な支援を求められると密かにタンスの底に隠していた蓄えをそっくり渡してしまう。EtsukoのSachikoに対する友情と従順さの理由は常識的感覚では説明しがたいが、SachikoがEtsukoの自己投影であるという視点で見れば、Sachikoに対するEtsukoの支援は、自己愛、自己正当化と解釈することも可能であろう。

二度目のSachikoの決断は最初の決断の撤回である。Sachikoに叱られてMarikoが家を飛び出した晩、Etsukoから今後の計画を問われると、Sachikoはこれまでの決断を翻して、アメリカへ行くことは中止し、Marikoの幸福を第一にして生きるという新たな決断を示している。

“My plans?” Sachiko finished filling the teapot, then poured the remaining water on to the flame. “Etsuko, I've told you many times, what is of the utmost importance to me is my daughter's welfare. That must come before everything else. I'm a mother, after all. I'm not some young saloon girl with no regard for decency. I'm a mother, and my daughter's interests come first.” (PVH 86)

「私は母親だから、娘の関心が第一である」という言葉は唐突に響く。Sachikoからは最も出てきそうにない言葉である。少なくとも読者はそのように思う。母娘喧嘩

をEtsukoに目撃されて、傷ついた自尊心を取り繕うためにこのような殊勝な言葉が出てきたのだろうか。そのことよりもっと重要なのは、Sachiko-Mariko母娘との交友関係の一場面を回想することを通して、Etsukoは同じようなことを経験することとなった自分と当時幼い娘であったKeikoとの関係を問い直しているのではないかということである。「これからの計画は？」とは人生の重要な岐路に立った時、Etsukoが自らに発した問いかけであったと思われる。そのときの選択肢の一つが、娘の幸福を第一とし、母親としての責任を果たすという道であったろう。Etsukoが取った選択、日本人の夫Jiroと離婚し、英国人のジャーナリストと再婚し、Keikoを連れてイギリスへ移住するという選択が正しいものであったかが間接的に問い直されているように思われる。

三度目はさらにこの決断が翻され、Sachikoはアメリカへ渡る決断に戻る。それまではSachiko-Mariko母娘は長崎の裕福な叔父の家に引越しをすることになっていた。Marikoは可愛がっていた3匹の子猫をそのまま飼い続けることができるので引越しを楽しみにしていた。それなのにSachikoは娘の期待を裏切り、とても信用できるとは思えないアメリカ人Frankを頼ってアメリカに渡航するために、一時的に神戸に転居しようとしている。どうしてSachikoはアメリカへ行くことにこれほど執着しているのだろうか。ここでもSachikoはアメリカがMarikoに多くの可能性を提供してくれる国であると繰り返し述べている。しかし同時に彼女は、Frankに裏切られてアメリカ行きが実現しない可能性、またたとえアメリカに渡っても、想像とは異なり多くの困難を経験することになる可能性も十分予測しているようだ。彼女が嫌がっているのは叔父の家で待ち受けている空虚な生活である。

“There’s nothing for me at my uncle’s house. Just a few empty rooms, that’s all. I could sit there in a room and grow old. Other than that there’ll be nothing. Just empty rooms, that’s all. You know that yourself, Etsuko.” (PVH 170-71)

引用箇所の中で、Sachikoは「あなたもよく知っているわね、Etsuko」と言っているが、それはSachikoがEtsukoの自己投影であることを示している (Shaffer,

1998)。確かに二人の状況は酷似している。Sachikoは東京で生活していたが、空襲で家族を失い、長崎の裕福な叔父の家に一時期身を寄せていた。Etsukoは原爆投下で家族、家、婚約者すべてを失った後、Ogata-Sanの好意で引き取られ、彼の息子と結婚し今の暮らしをしている。外見上は幸福な新婚生活に見えるが、何か空虚感が彼女の心を満たしている。このことは次の回想場面から読み取れる。彼女は或る夏の日、アパートの窓からぼんやりと (“emptily” (99)) 外の景色を眺めたことを回想している。そしてもっと晴れた日には、対岸の木々の上に夏雲を背景に遠い山並みが見え、その景色が長い午後後の空虚からひと時の開放感を与えてくれたと続けている。

On clearer days, I could see far beyond the trees on the opposite bank of the river, a pale outline of hills visible against the clouds. It was not an unpleasant view, and on occasions it brought me a rare sense of relief from the emptiness of those long afternoons I spent in that apartment. (PVH 99)

現実生活の空虚感、そしてそこから脱出したいという願望はSachikoとEtsukoに共通していて、ここでも二人は重なって来る。端的に言えば、二人にとって最初の結婚生活は不幸であったのだ。しかしこの時代の女性にとって新しい生活を始めることは容易ではない。このようなSachikoの決断の揺らぎは、女性にとって新しい生き方をする、特に離婚し、外国人と再婚し、最初の結婚で生まれた子供を伴って外国に移住し、まったく異なる環境の中で生きることがいかに困難であるかを表していると思われる。

3) Marikoへの説得

この場面の最後で、家から飛び出して行ったMarikoのことを心配して、Etsukoが探しに行こうと提案するが、Sachikoはすぐに帰って来るから心配ないと言って、Marikoのことをほったらかしにする。Etsukoの心の中で、この場面はKeikoが家を出て行った6年前の出来事とすぐに結びつく。Sachikoが取った態度はそのときのEtsukoの態度であったのだ。激しい悔恨の情がEtsukoの胸に込み上げて来る。

I feel only regret now for those attitudes I displayed

towards Keiko. . . But then I never imagined she could so quickly vanish beyond my reach; all I saw was that my daughter, unhappy as she was at home, would find the world outside too much for her. It was for her own protection I opposed her so vehemently. (PVH 88)

娘が家を出て行った時、現実生活の過酷さに耐えきれずすぐに家に帰ってくるのではとEtsukoは予測した。それが最後の別れになるとはまったく彼女には予測できなかった。激しい母娘間の口論の末の別れとなったことが読者にも推測可能である。ここまで見て来ると、Etsukoの回想はただ罪悪感と悔恨からくる精神的苦痛を彼女にもたらしめているだけのように思える。苦痛の癒しや慰めを獲得することは不可能なのであろうか。“There is nothing to be gained in going over such matters again.” (PVH 91) とEtsukoが繰り返しているように、回想から獲得されるものは何もないのだろうか。

II Marikoについての回想

次にMarikoについての回想場面を検討してみよう。ある晩、アメリカ人の男を捜しに外出したSachikoの帰りを待って、EtsukoはMarikoと一緒にしばらく過ごす。MarikoはEtsukoがどんなに優しく心配りしても容易に心を開かない。Etsukoに対して強い警戒心を持っているようだ。それだけでなくMarikoは異常な行動をする。壁を這う蜘蛛を捕まえ、口を開けて食べようとしたのだ。

Her mouth opened wider, and then her hands parted and the spider landed in front of my lap. I started back. The spider sped along the tatami into the shadows behind me. It took me a moment to recover, and by then Mariko had left the cottage. (PVH 82)

Marikoの行動は子供の無邪気さとはほど遠い、悪意を感じさせる不気味な行動である。他の場面でもそうであるが、異常な出来事の説明がなされないの、ただ気味悪さという雰囲気だけが後に残ってしまう。敢えて一つの解釈をすれば、MarikoにKeikoが投影されているとしたら、母親に対する娘の復讐心が暗示されているのではないだろうか。

この後、EtsukoはMarikoを探しに出かける。草の茂った土手の中を歩いていると異様な音がして、彼女は立ち止まって確かめてみると、それは古い綱の切れ端が彼女の足首に絡まっているせいであった。しかしこの綱はその後のKeikoの自殺やNagasakiでの幼児殺人に使用されたロープと連想が結びつき、不気味である。月光の中でその綱の切れ端を見たMarikoは怯える。

“Why have you got that?”

“I told you, it’s nothing. It just caught on to my foot.” I took a step closer. “Why are you doing that, Mariko?”

“Doing what?”

“You were making a strange face just now.”

“I wasn’t making a strange face. Why have you got the rope?”

“You were making a strange face. It was a very strange face.”

“Why have you got the rope?”

I watched her for a moment. Signs of fear were appearing on her face. (PVH 84)

短い会話のやり取りであるが、緊迫感のある場面である。Marikoの異様な表情、恐怖の気配は、綱の切れ端を見て、Etsukoの殺意を感じ取ったことを示している。

次の場面では、Etsukoに謝罪させようとするSachikoに対してMarikoは下品な言葉を使って反抗する。

Small tears were appearing in Mariko’s eyes. She looked at me briefly, then turned back to her mother. “Why do you always go away?”

Sachiko raised her hand again warningly.

“Why do you always go away with Frank-San?”

“Are you going to say you’re sorry?”

“Frank-San pisses like a pig. He’s a pig in a sewer.”

Sachiko stared at her child, her hand still poised in the air. (PVH 84)

母の交際相手であるアメリカ人に対するMarikoの嫌悪感、そのような男性と交際する母に対する彼女の憤りが、反抗的な態度、下品な言葉となって現れている。そして反抗的な娘に対する怒りが、Sachikoの暴力的な威嚇となって現れている。このような場面の回想から

Etsukoが得るものは何であろうか。Sachikoの生き方、Sachiko-Marikoの母娘関係は、その後のEtsukoの生き方、Etsuko-Keikoの母娘関係の鏡あるいは予兆となっているのは明らかである (Shaffer, 1998)。Etsukoの回想の動機はKeikoの自殺の原因を過去にさかのぼって突き止めることにある。彼女自身がその後取った行動が、幼い娘であったKeikoにとっていかに受け入れがたいものであったか、というEtsukoの自覚およびそれに伴う苦痛が、このような回想に重ね合わされていると思われる。

悪夢のような回想の中で、唯一の例外はInasaへの日帰り旅行の回想である。叔父の家に転居を決めたSachiko-Mariko母娘との別れを惜しんで、EtsukoはNagasakiの市街が一望できる風光明媚なInasaへ旅行をする。この日はMarikoも活き活きとして子供らしく活動する。Etsukoが買ってくれたおもちゃの双眼鏡が大変気に入ったようである。Sachikoに忠告されて渋々ではあったけれども、Etsukoに対してお礼を述べている。

Mariko continued to look through the binoculars. Then she brought them away from her face and put the plastic strap over the head.

“Thank you, Etsuko-San,” she said, a little grudgingly. (PVH 105)

それまではEtsukoがどんなに親切にしても、Marikoはほとんど関心を示さず、彼女に対して心を開かなかった。そのことと比較するとこの場面のMarikoの反応は大きな変化を示している。またMarikoはこの日クレヨンで写生帳に何枚かの絵を描いている。途中で出会った女性に描いた絵を褒められ、質問をされた時もきちんとした受け答えをしている。

“And what’s this?” the plump-faced woman continued. “A butterfly! It must have been very hard to draw it so well. It couldn’t have stayed still for very long.”

“I remembered it,” said Mariko. “I saw one earlier on.”

The woman nodded, then turned to Sachiko. “How clever your daughter is. I think it’s very commendable for a child to use her memory and imagination. So many children at this age are still

copying out of books.” (PVH 114)

これまでの回想では、Marikoの問題行動のみ挙げられてきたが、この場面では彼女の能力が強調されている。Marikoは絵を描くことに熱心であるのみならず、優れた技術を持っているようである。記憶に基づいてチョウチョの絵を描いたという彼女の無邪気な返答は、拡大解釈をすれば一つの芸術論にもなっている。記憶に基づいて小説を書こうとするIshiguroの創作論を述べているようで興味深い。

さらに最もMarikoらしさが現れているのは、Inasaから帰る途中で彼女がkujibikiに挑戦する場面である。彼女がkujibikiに強い関心を示したのは景品の一つが欲しかったからである。それは普通の女の子が欲しがらる縫いぐるみのクマの人形ではなかった。引越しのときに子猫を入れるバスケットであった。彼女の子猫に対する強い執着が示されている。彼女は3度挑戦する。3度目に引き当てたのは蜜柑箱のような大きな木の箱であった。

“What a strange-looking thing,” she said, passing it to me. It was the size of an orange box and surprisingly light; the wood was smooth but unvarnished, and on one side were two sliding panels of wire gauze.

“It may come in useful,” I said, sliding open a panel.

“I won a major prize,” said Mariko.

“Yes, well done,” Sachiko said. (PVH 123)

思いがけない景品が3人の心をさらに打ち解けさせ、この日の旅の満足感をさらに高めている。新しい未来が開けることを予兆するような一日であった。

しかし次の回想では場面は一転し、悪夢が再現される。この木箱はMarikoの楽観的な予測に反して、極めて残酷な道具として利用されるのである。楽しい旅行の回想も最終的にはEtsukoの癒しがたい罪悪感、Keikoを死に追いやったのは彼女自身であるという罪悪感に戻っていくようだ。

III Ogata-Sanについての回想

Etsukoは同時にOgata-Sanのことを回想している。その年の夏、Etsukoの義理の父であるOgata-Sanが訪ねてきて、しばらく息子夫婦のアパートに滞在する。

Ogata-Sanは原爆で家族を失ったEtsukoを自分の家に引き取り、面倒を見てくれた恩人である。Ogata-Sanの訪問の目的は徐々に明らかにされる。最近Ogata-Sanはかつての教え子であるShigeo Matsudaのことできわめて不愉快な思いをしたようである。図書館でたまたま手に取った教育関係の雑誌の中に、Shigeo Matsudaの論文が掲載されていて、その中でShigeo MatsudaはNagasakiの教育界の重要な人物であったOgata-Sanを痛烈に批判していたからである。Ogata-Sanはこの批判が納得できないでいる。彼の訪問の目的はShigeo Matsudaに会って納得できる説明を求めることであったようである。一見まったく関係のない話題のようにも思えるが、恩人を裏切るといふ点ではその後のEtsukoのJiroとの離婚（Ogata-Sanさんにもっと大きな衝撃を与えたはずである）と重なり合っている。

“It was quite extraordinary. He was talking about Dr Endo and myself, about our retirements. If I understand him correctly, he was implying that the profession was well rid of us. In fact, he went so far as to suggest we should have been dismissed at the end of the war. Quite extraordinary.” (PVH 31)

この場面での二人の会話から、Keikoという名前はOgata-Sanの亡くなった妻から取られた名前であることがわかる。

“Keiko is a nice name. Perhaps if it’s a girl we could call her Keiko.” (PVH 34)

この時点での家族の良好な絆が示されていて、Etsukoがその後選択した離婚と大きな対照をなしている。

これに続く場面で、Etsukoが夕食の支度をしていると、居間からバイオリンの音が聞こえてくる。Ogata-Sanが柵から下ろして弾いていたのである。Ogata-Sanの回想によれば、Etsukoが最初にOgata-Sanの家に来た頃、真夜中にバイオリンの練習をして家の者を驚かした。今Ogata-Sanに頼まれて、Etsukoはバイオリンを弾こうとする姿勢を取るが、弾くことを止めてしまう。おそらく原爆によりすべてを失ってしまった過去のつらい記憶につながっていくからだろう。

“I’m sorry, Etsuko.” Ogata-San’s voice had become solemn. “Perhaps I shouldn’t have touched it.” (PVH 58)

Ogata-Sanはすぐに自分が悪かったと謝罪する。短いエピソードであるが、時間が経過しても、容易に癒えないEtsukoの心の中の傷の深さを暗示している。

その晩夕食後、JiroとOgata-Sanは将棋を指している。Ogata-SanはShigeo Matsudaのことを話題にあげ、共産主義に感化されているのではと批判する。Ogata-Sanは戦後の新しい思想に対して懐疑的態度を示す。このとき、酒に酔ったJiroの会社の同僚二人が訪ねてくる。会話の中で訪問客の一人が選挙の際、夫婦別々の政党に投票したことが話題となる。客が帰った後、Ogata-Sanはこの話題を取り上げ、戦後の新しい思想、特にアメリカからもたらされた民主主義に対して懐疑的態度を示す。

Ogata-San sighed again. “Discipline, loyalty, such things held Japan together once. That may sound fanciful, but it’s true. People were bound by a sense of duty. Towards one’s family, towards superiors, towards the country. But now instead there’s all this talk of democracy. You hear it whenever people want to be selfish, whenever they want to forget obligations.” (PVH 65)

Ogata-Sanは、日本を一つにまとめていた規律や忠誠心、人々を結束させていた義務感、家族、年長者、国に対する義務感が弱まり、民主主義のみが話題にされていることに懐疑の念を示している。民主主義とは自己中心的な考え方、義務の放棄を肯定する思想ではないかと批判している。この場面をEtsukoが回想しているということは、Ogata-Sanのこの批判は当然Etsukoがその後とった行動に向けられている。自分のとった行動は、家族、恩人への義務感を忘れた、自己中心的なものではなかったかという自己批判である。

Ogata-Sanの回想にはもう一つ重要な側面がある。Etsukoの恩人というだけでなく、戦争責任者としての一面である。Ogata-Sanは戦前のNagasakiの教育界において重要な地位に就いていた。そして反戦思想を持った教師5人の処分に彼は関わったようである。過去の教育観が再検証される中で、彼のとった行動は教育を誤った方向へ導いたとして、かつての教え子Shigeo Matsudaから教育雑誌に掲載された論文の中で糾弾されたのである。Ogata-Sanは当時の教育者が国のため、正しい価値観が維持され、次世代に継承されるように最

善の努力をしたのだと、必死に自己弁護をしている。

“You have no idea, Shigeo, how hard we worked, men like myself, men like Endo, whom you also insulted in your article. We cared deeply for the country and worked hard to ensure the correct values were preserved and handed on.” (PVH 147)

過去にとった行動が誤ったものであったと審判された時の苦痛と、なんとかそのことを正当化したいという強い想いにおいて、Ogata-Sanは現在のEtsukoと重なり合っているように思われる。

IV Nikiについての回想

Etsukoの回想の一番新しい部分はNikiについてである。前述したように、Nikiは既に死亡している再婚したイギリス人の夫との間に生まれた娘（19歳）であり、現在ロンドンで生活している。Nikiは帰省の理由をはっきり説明してないが、状況から推測して、母親のことが心配で帰って来たのだと思われる。

She did not mention Keiko until the second day. It was a grey windy morning, and we had moved the armchairs nearer the windows to watch the rain falling on my garden. (PVH 9)

上記引用部分に示されているように、Keikoの死は母娘の間に重く横たわり、簡単に触れることが難しい問題である。窓から外の景色を眺めるという場面は物語の中で何度も繰り返されるが、答えを見つけようとして、容易に答えが見つからない状況を暗示しているようだ。

Nikiが滞在中のある日、EtsukoとNikiは散歩に出かけるが、その帰り道、小柄の婦人に声をかけられる。それは近所に住むMrs Watersで、彼女は数年前にNikiとKeikoのピアノ教師であった。彼女はKeikoの自殺のことは何も知らないようで、NikiのことをKeikoと間違えたり、二人の現在の生活のことを質問する。表面的には普通の日常会話であるが、Niki、特にEtsukoにとっては、深い傷口に触れられるような、苦しい会話となっている。

“How is Keiko getting on now?”

“Keiko? Oh, she went to live in Manchester.”

“Oh yes? That’s a nice city on the whole. That’s what I’ve heard anyway. And does she like it up there?”

“I haven’t heard from her recently.” (PVH 51)

Keikoの死が近所の人には伏せられていることがわかる。共有するのが難しく、そのことが二人の孤立感を強めている。

Nikiの滞在4日目、彼女はよく眠れず、予備のベッドルームと部屋を替わりたいとEtsukoに頼む。廊下を挟んだ真向かいにKeikoの部屋があり、奇妙な感じに襲われると言う。Etsukoも同じような経験をしていた。かつてのKeikoの部屋は家の中で最も快適な部屋で、窓から素晴らしい景色が眺望できる。だがそこは彼女が6年前に出て行くまで、彼女が引き籠って、決して他者の入室を許さない部屋であった。

For the two or three years before she finally left us, Keiko had retreated into that bedroom, shutting us out of her life. She rarely came out, although I would sometimes hear her moving around the house after we had all gone to bed. (PVH 53)

Keikoのイギリスでの孤立した、不幸な生活がかなり率直に回想されている。Etsukoがなぜ日本を離れてイギリスで暮らすようになったかについて、作品においては何も語られていない。恐らくSachikoの生き方、彼女とMarikoの母娘関係の中にその空白部分が鏡のように写されているのだろう。その経緯は推測するしかないが、Etsukoの決断と行動の結果はここにはっきりと明示されている。それはKeikoの不幸な生活とその結果としての自殺につながったのである。

苦痛の軽減の可能性、Etsukoの人生に対する肯定的解釈はNikiによって示される。Nikiが帰省してから5日目の事である。NikiはEtsukoに彼女の友人の事を話す。その友人はNikiから話を聞いてEtsukoのことに関心を持ち、詩に書きたいと言う。

“I was telling her about you,” Niki said. “About you and Dad and how you left Japan. She was really impressed. She appreciates what it must have been like, how it wasn’t quite as easy as it sounds.” (PVH 89)

ここには新しい視点からEtsukoの人生に対する解釈の可能性が示されている。恐らくEtsukoの勇気を賞賛し、女性の自立を讃える詩となることが予測される。次のNikiの言葉が示すように、Etsukoは困難なことをやり

遂げたのであり、それは誇りにすべきことなのである。

“It couldn’t have been easy, what you did, Mother. You ought to be proud of what you did with your life.” (PVH 90)

Etsukoは自分に対する誇りなどとは無縁の心境であるが、母親の視点から見たら多くの点でKeikoと類似しているNikiの励ましは、Etsukoの心を軽くしてくれたはずである。この回想の直後、前述したSachiko-Mariko母娘との交遊の中で唯一の楽しい出来事と言ってもよいInasaへの遠出が回想されている。

Inasaの丘から眼下に広がる戦災から復興するNagasakiの町を一望したとき、Etsukoは未来のために生きる決意を以下のように述べる。

“But it’s so good to come out here. Today I’ve decided I’m going to be optimistic. I’m determined to have a happy future. Mrs Fujiwara always tells me how important it is to keep looking forward. And she’s right. If people didn’t do that, then all this” – I pointed again at the view – “all this would still be rubble.” (PVH 111)

この回想場面は二重の意味で重要である。第一の重要な点は、戦争により多くを喪失したEtsuko自身がその喪失の苦痛を乗り越えて、未来のために生きようとする積極的意志を表明していることである。第二の重要な点は、この場面を回想することにより、Etsukoは現在の喪失の苦悩、Keikoの自殺という喪失の苦悩を乗り越える力を得ようとしていることである。

V Etsukoの変化 –結びにかえて–

物語はロンドンへ帰るNikiをEtsukoが見送る場面の回想で終わる。その日の昼食後二人が散歩している時に、Etsukoは彼女がその朝渡した昔のカレンダーの写真のことを話し始める。Etsukoのことを詩に書こうとしているNikiの友人が、Nagasakiの写真か絵葉書を資料として求めていることを聞いて、Nikiに渡したものであった。そのときNikiは帰り支度に忙しく、渡されたカレンダーを丸めて無造作にトランクの隅に押し込んでいた。カレンダーはNagasakiの港を一望した写真であった。Etsukoはその朝Sachiko-Mariko母娘との日帰り旅行を回想していたのである。その旅に何か特別なものがあっ

たのかとNikiから質問されて、Etsukoは次のように答えている。

“Oh, there was nothing special about it. I was just remembering it, that’s all. Keiko was happy that day. We rode on the cable-cars.” (PVH 182)

「Keikoが幸せであった。一緒にケーブルカーに乗った」とEtsukoは答えている。多くの研究者の指摘があるように (Wong, 2000: 平井, 2011), EtsukoはMarikoをKeikoと混同しており、人間の記憶の不確かさの一例として見ることもできよう。しかしそれは物語の中では極めて効果的な混同であると思える。Inasaの丘の上から眺望した戦災から力強く復興しているNagasakiの市街地、美しい夏の海に囲まれた港の景色、そして子供らしく生き生きとしていたMarikoにKeikoを重ね合わせたいという母親の願望が雄弁に語られている。Ishiguroの優れた小説技巧が示されている。

この後、控えめながらも、Etsukoは新しい決意を述べる。

“I was just thinking the other day,” I said, “perhaps I should sell the house now?”

“Sell it?”

“Yes. Move somewhere smaller perhaps. It’s just an idea.” (PVH 183)

上の引用箇所には、家を売却することで、不可能であることはわかっている、Keikoの不幸な人生の回想から解放され、残された娘Nikiのために生きようとするEtsukoの意思が表明されていると解釈することができる。

結論として言えることは、Ishiguroは回想によって人間の表面下の感情の動乱に向かい合う心の軌跡を描き出そうとしたのではないかということである。他者への自己投影、責任転嫁、自己正当化など回想の否定的側面のみならず、同時に実像に対峙し、苦痛を反復することを通して、救済の道が開けてくるという回想の肯定的側面を模索しているのではないだろうか。手法面でも、内容面でも、回想の複雑さと人間の再生に繋がる回想の意義が深く探求されているように思われる。このような点でこの作品は成功し、彼の作家としての出発点として大きな意義を持ったのではないだろうか。

Text

Ishiguro, Kazuo (1982). *A Pale View of Hills*. Faber and Faber Limited.

参考文献

- 平井杏子 (2011) 『カズオ・イシグロ』 水声社 (東京)
ロッジ, デヴィッド (1997) 『小説の技巧』 白水社 (東京)
Shaffer, Brian W (1998). *Understanding Kazuo Ishiguro*. University of South Carolina Press.
Wong, Cynthia F (2000). *Kazuo Ishiguro*. North House Publishers Ltd.

